

今年度の特記事項

- ・特養稼働率が、2019 年 97.4%、2020 年度 98.2%と、かんだ連雀設立以来最高の数値を 2 年連続で記録した。

【分析】

- 1) 主治医と看護師のこまめな連絡体制と適切な連携をはかった。
 - ・看護師から主治医へのタイムリーで細やかな報告・連絡・相談が、その後のムンテラから看取りまでのスムーズな流れに結び付いている。
- 2) 施設内の各専門職の連携と気づき
 - ・介護員、リハ職の入居者の変化への気づきを看護師が速やかに受け止めることにより、体調変化が微細なうちに対応ができているため、安定した状況が続いた。
- 3) 入居者の日中の過ごし方への配慮
 - ・ケアプランのみならず、食事、入浴、余暇、様々な方面から、入居者の日常の過ごし方に対して、チームアプローチを行っていることが、入居者の日常生活を評価する目線を育てている
- 4) 相談員の入居者家族との関係作り
 - ・上記の変化を相談員が、こまめに家族に連絡をすることにより、信頼を得て、関係を良好なものにしているため、いざという時の家族の判断の促しが円滑に進んでいる
- 5) 相談員の自治体特養入所担当者との関係作り
 - ・入居のミスマッチがないように、動き出しが円滑かつ短期間で済むように、適切な状況評価を基に、長期的なアプローチをしている。そのため、自治体担当者との関係作りにも配慮を怠らず、厚い信頼を得ている。

1. その方らしい生活の実現を中心に据えた支援

- ・特養のみならず、予防居宅、居宅、通所、訪問、定期巡回、どの事業も丁寧なアセスメントに基づいた事業展開を行っている。さらに、施設内事業連携により、より多角的な支援を実現しつつある。

2. 財務の健全化（単年度黒字化）

- ・居宅事業の 4 人体制化、外部との運行业務契約終了し職員送迎に切り替えたこと、全職種での派遣契約終了等、経費削減を実現したが一方で削減分が人材紹介料に吸収されてしまった。

3. 地域における高齢者・家族支援の拠点としての役割

- ・認知症カフェは、アフターコロナに舵を切り、新たなるスタイルを生み出している。
- ・すみれ会（連雀在宅&区社協&新たなボランティア人材）は、コロナ禍での買い物ワゴン展開により、新たな局面を迎えている。
- ・在宅サービスセンターの一体化については、デイの稼働率向上等、成果が形になってきている。
- ・見守り相談窓口設置事業の受託二年目。自治体に評価される成果を出している。

4. 建物設備大規模改修計画の実施

- ・無事終了している。

